

ノーベル平和賞受賞団体 I C A N

ベアトリス・フィン事務局長と若者が語り合う！
ベアトリス・フィン事務局長と語る 平和
な世界の実現に向けて

日 時： 2018年1月15日(月) 13:30-16:30 (開場 13:00)
場 所： 広島国際会議場地下2階 ヒマワリ
主 催： 広島市、(公財) 広島平和文化センター

フィン事務局長による基調講演&質疑応答

フィン事務局長基調講演

司会：それではお待たせしました。ベアトリス・フィン ICAN 事務局長による基調講演、演題は「We Shall Not Repeat the Evil: How Japan Can Lead us Towards a Nuclear Free World」です。フィン事務局長、よろしくお願いいたします。

ベアトリス・フィン事務局長：ご紹介、ありがとうございます。松井市長、ありがとうございます。小溝さま、そして広島の皆さま、私を歓迎してくださってありがとうございます。

ここは、私にとって非常に大切な場所です。自分の目で見て、そして今まで聞いてきたストーリー、物語に印をつける場所です。本当に私にとっては、道、建物、そしてかつての街の面影を見ることは非常にパワフルでありました。そしてまた、この街に新たな生命をもたらした人々と会うことば一番重要でした。この市は、人間性の最悪なるものを目撃しました。そして、この地において、私たちは初めて核兵器の無差別性を学んだのでした。また、その恐怖は標的を限定することもその影響を封じ込めることもできない種類のものであることを学びました。

そして、ここで、医療従事者は放射線がもたらす人々の新しい苦しみを目撃しましたし、私たちは、原子爆弾の爆風が虐殺の終わりではなく、それは悲しい、これから何十年も続く苦しみと死の始まりであったことを知ることとなったのです。

しかしながら、広島と長崎が持つ真実はこれだけではありません。この二つの都市は苦しい、しかしそれでいて非常に力強い絆で結ばれています。というのは、人間の最善が最悪と向かい合ったからです。そして、それを乗り越えたからです。

世界が必死になって歴史の章を閉じようとするとき、被爆者は沈黙しなかったのです。被爆者は消え去ることを拒否しました。そして、世界がここで起こった恐怖を忘れることを拒否しました。被爆者は世界大戦の一つが終わった一方で、新たなより暗いストーリーが始まったということを知っていました。この街は、その第一章の始まりの場所なのです。

広島の人々は、自分たちの手で街を再建しました。そして、自らの声を上げました。そ

して、ここで、この 70 年間に起こったことを証言し、世界に知らせました。私はこれまで、多くの被爆者にお会いして、お話をお聞きしました。小さな地域の会議、学校、そして信仰の場所、また、国家元首との会議、そして国連など、いろいろな場所で聞きました。

そして彼ら被爆者は率直に言っています。「これが私たちの話なのです。目を反らさないでください。そして人類の歴史の大きな過ちを、もう繰り返さないでください」と。被爆者は、苦しい過去をもう一回、生きなくてはなりません。苦しい記憶を思い出さなければいけません。しかし、それにより、私たちがより良い未来を作ることができるように、そうしてくださったのです。

私は ICAN の事務局長として、核軍縮交渉に深く関わってきました。核兵器禁止条約は、被爆者の存在なしには実現しなかったでしょう。彼らは、自らが目撃した歴史の恐怖に対し毅然と立ち向かいました。受け身の犠牲者ではなく、積極的な提唱者として、です。そして、被爆者は黙っていることを拒否し、忘れることを拒否しました。

彼らは身も心も傷ついています。そして、その傷をもって、彼らと同じ経験をせずに済んでいる私たちに警告をしてくださっているのです。今この機会に、ここにおられる被爆者の方々に思いをはせたいと思います。また、他のどこかにおられる被爆者の方々、それから話を伝えてくださった家族の方々、また、次の世代の広島の人たちが、被爆者の生存の物語を引き継いでくださったことに対しても思いをはせます。

それでは、皆さん、ここで、この途切れることのない真実の声を上げてくださった人たちを称え、賛美し、そして感謝しましょう。

真実を知っているのは被爆者の方々だけではありません。そして、その経験を生きぬいて、この都市を灰から再建した人々だけでもないのです。私がここで会った若い人たちもこの過ちを繰り返さないという熱意を持っています。

これは、私にとっていろいろな意味でとてもうれしいことです。というのは ICAN というのは、若者が主導している運動だからです。今までは、核軍縮は、若い人が関わるものではありませんでした。しかし、まず、その核兵器反対を訴えていたのは、年齢層の高い世代、科学者や知識人、学者でした。これらの人々の多くは、自らが核兵器の開発に関わり、その破壊力を認識して後悔したという人たちなのです。

核兵器に反対する最初の署名は 70 人の科学者によるもので、実際にマンハッタン計画

で最初の核兵器開発に関わった人々が出したものです。しかし、70年以上経っても、問題は解決していません。たったひとりの人がこの世界を終わらせる力をその手にしている、そんな危険な状況に私たちはさらされています。ですから、新しい世代の人に、この問題の解決を委ねなければなりません。前の世代が解決できなかったものですから。

そして、今日ここにいる若い皆さん、皆さんこそがその世代なのです。私はこの地で若い人たちにお会いしましたが、そのことは私に希望を与えてくれました。そして私たちはきっと成功するという明るい展望をもつことができました。広島、長崎は希望の都市なのです。この都市は、核の闇から立ち上がりました。そして、世界を照らす光となったのです。だからこそ、この条約に署名することは可能だと思えるのです。私たちも、核兵器を禁止するというこのキャンペーンにおいて同じことができる力を与えてくれました。

グローバルな問題は、グローバルな解決が必要です。そして、解決を主導する責任は主に若い人たちに託されます。私が非常に楽観的に私たちの成功を考えられるのは、若い人たちが三つの素晴らしく強力な武器を持っているからです。それが全部合わさると止めることは不可能なのです。この秘密の武器とは、希望、エネルギー（活力）、そしてソーシャルメディアです。

希望は、私たちがこの仕事をする原動力となってきています。過去70年、国は恐怖が動かしてきました。大国が世界をコントロールするために核兵器を製造しました。しかし、実際は、この武器が私たちをコントロールしているのは明白です。恐怖に対する薬というのは、希望です。若い人たちに、成功のために希望を活用してもらいたいです。

そして、それから二つ目の秘密の武器を使いましょう。活力です。私たちは、若い人たちがこの運動に活力をもたらすのを見て、本当にうれしく思っています。困難なことにぶつかることもあるでしょう。この何十年も、その分野で活動してきた人から、考えが甘いと言われ、自分たちが成し遂げようとしていることは不可能だと言われるかもしれません。しかし、若い人たちは、この悲観主義を自らの力で吹き飛ばします。新しい希望をもたらし、この分野に新しい息吹を吹き込んでくれます。また、新しい考え、そして革新をもたらしてくれるのです。

そして、三つ目の秘密の武器は、これまでと違うものをもたらしてくれるかもしれないソーシャルメディアです。若い人たちは、その希望とエネルギー、活力だけで新しい考えを創り出しているわけではありません。彼らには技術があり、アイデアを世界中の人に

広め、力を集めることができるのです。皆が力を合わせるにより、私たちはより大きな力を得ることができます。ソーシャルメディアはお互いがつながることを可能にするのです。

広島 ICAN のメンバーが、その考えをメキシコの ICAN のメンバーに伝えることができます。会ったこともないのにできるのです。そしてまた、例えば、インドネシアの ICAN のメンバーとつながることもできます。その 3 人がすべて、私の母国スウェーデンの若者とつながるかもしれません。ICAN について聞いたこともない、でもこの問題に関心を持っている若者と。こういったグループが、政治家と直接連絡をとり、核兵器禁止への署名を求めるのでしょう。希望、エネルギー、そしてソーシャルメディアというのは、非常に強力な組み合わせです。

私たちは、核兵器が存在し続ける状態に対し声を上げる権利を持っています。今週、ハワイでは、大変気の毒なことが起こりました。核ミサイルがハワイを攻撃するという誤った警戒警報が出され、30 分間にわたり人々は死の恐怖におびえました。愛する人々に別れを告げ、家に帰って、子供たちを抱きしめ、そして恐怖の中、待ち続けました。こういった人たちは、このような恐怖を抱きながらの生活を強いるシステムに対して、声を上げる権利があるのです。

私たち全員がこれに対して声を上げる権利を持っています。これがまさに ICAN のミッションの主要なものになります。「軍縮に民主主義を」というものです。核兵器は、その性質上、そしてまた私たちが導入した構図の性質上、独裁主義的です。核兵器の使用というのは、人間性に背きます。開発は理性に背くものです。そしてまたその備蓄は、民主主義に背くものです。どのような民主主義国であれ、この使用を支持する国というのは、民主主義を裏切っています。核兵器というのは、また、私たちの時代の大変大きな矛盾です。まさに破壊を提案することで平和を約束するという、逆説的な状況を生んでいます。そして、それは大変危険な状態であり、永遠に続くような均衡ではありません。

私たちはこれに立ち向かう必要があります。私たちがこの街から始まった物語の終結を書くつもりがあるのであれば、私たちがおじけづき、そして現実から目を反らし結果を他人に委ねるのであれば、核兵器がこの物語の終結を書くということになります。つまり、それは人類の終焉ということになります。

まさにこの街は、核時代の矛盾を議論するにふさわしい場所です。この場所で様々な形で矛盾が生まれ、そして、この街で具体化したわけです。それは過去から今でもそうで

す。先ほど言いましたように、この場所で、私たちは人間性の最悪なるものを見ました。恐ろしく滑稽なりトルボーイというコードネームを持っていた爆弾が、何も知らない市民を襲ったわけです。新たなタイプの破壊が生まれ、新たな恐怖の時代が始まり、そして、皮肉にも平和の可能性を世界から奪ったわけです。まったく新しい警報を鳴らしました。原爆投下は第二次世界大戦を終わらせて、安全復興の時代を作り始めたのではなく、代理戦争を生み、そして全滅の可能性がつきまとうような世界を作ったわけです。私たちは、全面的な破壊へとつながる軍拡の道を歩み始めたのです。

この街は、ただ、警告としての役割を果たしているわけではありません。広島は、火山灰に埋もれ、歴史の一部となったポンペイのような街ではありません。広島は立ち上がったわけです。広島は今も、生き続けているわけです。そして原爆の前の記憶、原爆の後の記憶によって守られてきました。そして皆さんと、皆さんの祖先がこの街を復興したわけです。そして広島は、人間性の最悪なるものに対して最善をもって応えたわけです。そして広島は、まさに希望の街となりました。

私は、人々の人間性が集まることで、如何なる脅威にも立ち向かうことができると信じています。私たちは、この破壊の地から核兵器の脅威を克服できると信じています。そうでなければ、私は今こうしてこの活動には携わってはいないでしょう。

確かに、私のことを理想主義だと言う人はいます。それは、私は構いません。私たちは理想主義者です。ですが、私たちは世間知らずなわけではありません。世界の圧倒的多数がこの核の問題を解決したいと考えているわけです。核を開発せず、そして核の恐怖をこれ以上広げないということを望んでいます。私たちは理想主義者であり、あらゆる予想に反して、核禁条約が現実になることを信じてきました。そして私たちは活動家として、不可能だと見えるものを不可避なものにするというような役割を担っています。

また、理想主義というのは、無謀ということではありません。この理想主義というものは、まさに、この人類と核兵器を語るにあたり、最も必要とされているものです。私たちの活動を批判する人たちは、ある事実を受け入れられません。彼らは、核兵器には扮装を予防する能力があると信じていますが、この論理は合理的でなく、その事実を彼らは受け入れられないでいるのです。

核兵器は広島と長崎で使用されて以来、紛争下で使われていません。しかし、これは賢明な指導者のお陰ではありません。たまたまな幸運ただけです。私たちはこの運が尽きるのをただ待つわけにはいきません。数学者に聞いてみてください。核兵器が使用される確率、これはいつでもゼロを上回っているということです。つまり十分な時間が

あれば、いつか必ず核兵器は使用されるということです。

私たちのことを世間知らずとか、非理性的だという人に質問を投げかけます。このストーリーが行き着く先は、核兵器の使用か廃絶かのどちらしかないとわかっているなら非理性的なことを言っているのはどちらでしょうか。私たちは世間知らずではありませんし、非理性的でもありません。私たちは人類の側についています。そして、人類の生存の側についているわけです。

何もしないということは許されません。何もしないというのは、いずれ核兵器が使用されることを受け入れることです。実際に核兵器が如何なる形であれ、存在するということは、今、その使用に向けての時間が刻々と迫っているということを意味します。とにかく早く行動する必要があります。

ここ広島にいる皆さん、皆さんのご友人、ご家族、ご隣人は特別な役割を持っていると思います。核のない世界ができると思います。皆さんは本当にそのストーリーの中で重要な登場人物です。皆さんの声、同義的な権威が必要とされています。それを皆さん、ご存知だと思います。

それをご存知だからこそ記念碑を創り、非常に力強いメッセージを持つ記念公園を創られました。これらは他の人たちに警鐘を鳴らしています。歴史から学んだことを忘れてはいけないと伝えているのです。1945年の運命の日の出来事を共有しています。ここで何が起こったかを子供達に話されます。外にある慰霊碑に、「過ちは繰り返しませんから」と刻まれました。皆さんはこれらのことをご存知なのです。

しかし、特にこのメッセージを聞いてほしい人がいます。それは、その人たちは、広島の人々の価値観を共有すべき人たちです。それは東京にある日本政府のことです。日本政府は、他のどの国よりも核兵器のもたらす結果を知っているはずですが。

しかし、日本政府は、米国の核の傘の下にあり、核使用の脅威の下で暮らすことを問題だと思っていないようです。そして、核兵器禁止条約に加わっていません。皆さんの政府というのは、広島と長崎になされた過ちが他の街で繰り返されてもいいと思っているのでしょうか。

皆さんの政府が、その抑止の効果を信じているとすれば、それにより核拡散を助長しているということです。そして、この核の傘に守られている他の国々とともに、核兵器使用へと近づけているのです。広島と長崎が代表している価値観と、そして日本政府の政

策の間には大きな隔たりがあります。その隔たりを埋めなくてはなりません。そして、皆さんの声で東京の日本国政府に、「核兵器使用を進んで選ぶようなことは受け入れられない」と言わなくてはなりません。

日本こそが世界の核軍縮の先導を走り、そして条約に参加すべきです。日本は民主主義国家であり、国民の要望に応えなくてはなりません。皆さんが、国民の声を一つにまとめれば、政府はそれを無視することできないでしょう。広島の人たちは、このことに関しては道義的権威を持っています。日本も、政府も、核戦争がもたらす結末を直接知っている国として、道義的権威となりうるのです。

皆さんの政治家に、この大義のために立ち上がるよう促してください。そして、聞いてくれないならばもっと、大きな声を出しましょう。そして、皆さんと同じ価値観、同じ大義を共有している人が何百万人も世界にいることを覚えておいてください。これらの人々と共に民主的な軍縮を誰にも止めることができない力にしましょう。

この草の根の力こそが、核兵器禁止条約につながったのです。権力を持つ人々は今まで、これは不可能だと言っていました。この条約により私たちは国際的な規範のフレームワークを作りました。この条約をきっかけに、権力の象徴ではなく恥の象徴であるという新たな国際基準を作る枠組ができたのです。

かつて、化学兵器、生物兵器、そして、地雷、それからクラスター弾を禁止するのは不可能だと言われていましたが、私たちはそれらの兵器を禁止しました。皆さんの政府は、長い間矛盾を繰り返してきました。何人もの首相が広島の価値を話しました。そして、「核廃絶は、政府の優先順位のうちの一つであり、唯一の被爆国として道義的リーダーシップをとる」と言ってきました。そして、核戦争の恐怖について語ってきました。しかし、核戦争が現実になるのを防ぐための禁止条約ができたにもかかわらず入ろうとしないのです。

いつも、難しいことは不可能だということと言う人がいます。しかし、ICANの活動家たちはこれを現実にししました。たくさんの人が十分に声を上げれば、物事は変えられることを示したのです。政府は人々に応えます。人々は、核兵器は意味がないということをおぼえており、変化を要求しているのです。核兵器禁止条約が現実のものとなり、多くの国々が支持をしている今、日本は、この問題でリーダーとならなくてはならない。この近代的合理的な世界から取り残されているのです。

行動を伴わない言葉というのは過去の時代のことです。私たちは日本の行動とリーダー

シップを必要としています。世界が、あなた方、広島市民、この国の人たちを必要としています。「日本が第一歩を取る必要がある」ということを、皆さんがお願いし、皆さんの代表がそうできるようにしてほしいのです。しかし、日本に、この問題に関わってほしい理由がもう一つあります。国境を隔てて北朝鮮があり、自分たちの核兵器のプログラムで、破壊の脅しをかけてきています。

日本が再び核の標的となる可能性があるのです。ここで、多くの、より高性能の、大きな核兵器がいると考えるかもしれませんが、私たちはここで考えなければなりません。「核兵器がある限り、この脅威から解放されることはあるのだろうか」と。

この核兵器は、私たちを戦争へと導きます。1万5000の核兵器がありながら、北朝鮮の核兵器開発を抑止できませんでした。冷静な思考の持ち主がいるからという理由だけで書くが使われずには限らないのです。もし、皆さんが、金正恩だとか、ドナルド・トランプが私たちを全滅させる力を持っているということに不安を感じるのであれば、皆さんは核兵器に不安を感じているわけです。

核兵器がなければ、アメリカは北朝鮮に対して無防備な状態になるでしょうか。もちろん、そういったことはありません。米国が核兵器を持ち、日本はその核の傘に依存していますが、北朝鮮の核の野望を止めることはできませんでした。逆にその野望をあおただけでした。

私たちは北朝鮮の問題に対する解決策を持っています。その解決策をもって他の問題もすべて解決できます。全員が核兵器禁止条約に参加する。そして、核兵器を廃絶することです。歴史を見ますと、ある武器を禁止すれば、いずれその武器は廃絶されることが分かっています。

国際的な条約で違法となった武器というのは、その正当性を失います。そして、政治的なステータスを失います。また、そうした違法とされた武器を作る会社は、資金を得ることが難しくなります。なぜなら、それを続けることで評判を落とすというリスクがあるからです。

銀行、年金基金、それ以外の金融機関は、そうした兵器の製造業者からお金を引き上げます。核兵器に関するルールを変えることは、公式にこの条約を最初から採択した国々の枠を超えて影響を与えるわけです。私たちは国際的なキャンペーンです。ですが、各活動というのはすべてローカルなものです。数百のグループが世界中で私たちの活動に参加しています。私たちは彼らの活動を支援し、各国の政府が条約を批准するのを奨励

し、そして完全な核軍縮の道筋を築こうとしているのです。

こうした取組の緊急性がかつてないほどに増えています。特に今週は、米国のトランプ政権に関するニュースもありました。新たな米国の核戦略の見直しに関する流出文章のコピーを見ますと、本当に私たちは憂慮する必要があることがわかります。

この文章によりますと、米国は今後、軍縮に向かうのではなくて、また、抑止の失敗を認め、新たな安全保障体制を構築するのではなくて、核兵器の備蓄を増やすとしています。そして、新しい低出力の核兵器をより利用しやすい核兵器を作ると彼らは言っています。

彼らの懸念はこうです。既存の核兵器はあまりにも大き過ぎる。そして、破壊力が高過ぎる。したがって、使えない、と。しかし、この考え方には大きな問題があります。広島と長崎で利用された原爆は、今現在の定義では、低出力ということになります。例えば現在のトライデント搭載潜水艦は、1945年に落とされた原爆の70倍の破壊力を持っていると言われていています。米国の高官が言っているのは、すなわち、「ここ広島で起こったことは小規模の被害だ」と言っているわけです。彼らは仮想敵国が、「核兵器は大き過ぎて使わないだろう。と思うことを心配しています。しかし、この街を破壊した程度の爆弾ならもっと落としても構わないと言っているのです。

ですから、「広島のような被害を再びもたらすことに躊躇しない」と、彼らは言っているわけです。広島の人々にぜひお願いしたいのです。特に若い方々に、他の世界の若い方々に、ここで何が起こったのかということをお話してください。そうしなければ、世界の人たちは広島で起こったことは小規模な被害だと考えます。そして、このような被害が、もう一度起こるといえることがあります。世界中の若い人たちが、皆さんが伝えた話を各地で共有することで、各国の政府が、この危険な考え、被爆者の記憶や全ての核兵器の被害者に対する侮辱と言える考えに組み込まないように働きかけることができるのです。

当然、このようなトピックというのは気が重くなります。世界の終わり、核のハルマゲドンを通して世界が終わるといったことを話題にするのは気が重いことです。私たちの生活が突然何の前触れもなく終わってしまう、そのような危機に私たちは常に直面していることを考えるのは恐ろしいことです。空からある朝、破壊が、降って来るといえることがあるわけです。73年前にまさにそうしたことがここで起こりました。しかし、私たちは希望を持っています。

そこで、今日は、最後の私の希望、そして ICAN の希望についてお話をしたいと思えます。私たちは核兵器の終わりを見届けることができると考えています。私たちは核兵器を恐れるべきです。恐怖というのは理性です。そして、恐怖というのは現実です。私たちはこの最近の歴史の中でも、核兵器の使用に最も近いところにいます。

そして、驚くべきことに、毎日のように国々の間で、地球上から相手の国を抹消するというような脅しの言葉が交わされています。この言葉の戦争が、やがて兵器の戦争へとつながる。そのようなところに来ているわけです。

私たちは一方で、核廃絶に最も近いところに来ました。また、希望を持つだけの理由がありますし、私たちが希望で恐怖に打ち勝つことができると信じるだけの理由があります。昨年、国連で 122 の国々が、核兵器禁止条約を採択しました。これは、世界の国々の大多数になります。ということで、核兵器の禁止と廃絶に大変近いところに来ているわけです。

まだまだ、やらなければならないことがあります。私たちは、民主主義国に暮らしています。ということは、選択肢があります。もし、政治指導者が希望、理性、そして未来の側につかないということであれば、私たちは別の政治指導者を選ぶ必要があります。もし、私たちの国々が条約に加盟しないということであれば、声をさらに大きくし、無視できないようにする必要があります。

また、核兵器の保護の下で生きている国々を、世界の中で孤立させるべきです。そして核保有国を、恥と不名誉で包囲すべきです。広島で起こったことは、決して忘れられてはなりません。そういった意味で、皆さんは、この物語の中で大変重要な役割を担っておられます。

長崎と広島には、歴史の中で唯一無二の存在です。私たちの挑戦というのは、広島と長崎を今後も唯一無二の存在にするということです。これ以上、被爆地のリストに、広島・長崎以外の場所を付け加えるような街がないように。これ以上被爆者を作らないように。そして皆さんの価値観を東京の価値観、そして、世界の価値観にしなければなりません。

皆さんの声は、この会場から世界へと広がり、そして、良識と希望を求める他の人々の声と合わせる必要があります。特に皆さんのような若い方々の肩にかかっています。この核兵器に打ち勝つために、他の人々の希望、エネルギー、そして、ソーシャルメディアを通じた他の人たちとのつながりつながりを武器として活用してください。ICAN は、皆さんのエネルギー、熱意、そして希望を、ぜひ活用したいと思っています。

ぜひ、nuclearban.org を通じて、あるいはフェースブックや Twitter といったソーシャルメディアその他、今時の若者のツールを使って参加してください。私たちと、そして世界中の若者とつながってください。よりよい未来への希望。それを私たちは手にする権利があります。政治指導家に対し求めるべきものです。

皆さんが求めるものを彼らに伝えましょう。そして、核兵器の廃絶の声を上げてください。今後も広島市及び広島市民の皆さま、特に若い方々とともにこの目標のために、活動していきたいと思っています。ありがとうございました。

質疑応答

司会：フィン事務局長、核兵器廃絶に向けての熱い思いを話していただき、ありがとうございました。

少し早く終わりましたが、続きまして、質疑応答の時間に移ります。限られた時間ではありますが有意義なものになりますよう、皆様のご協力をよろしくお願いいたします。それでは、フィン事務局長に質問のある方は挙手をお願いいたします。

では、あちらの前の女性の高校生の方。では、学校名とお名前をお願いします。

ハセ（舟入高校）：皆さま、こんにちは。私は舟入高校のハセと申します。平和、そして戦争について、子供の頃から学んでいます。というのは、広島に住んでいるからです。皆さんは、いつ、どのようにして平和に対して関心を持たれたのですか。

ベアトリス・フィン事務局長：どうもありがとうございます。私が育ったところは、スウェーデンの中でも多くの移民がいるところです。非常に多様性のある地域です。学校に行き始めた時、スウェーデン生まれの両親がいたのはクラスの2、3人だけでした。

子どもたちの両親、あるいはその子どもたち自身が、戦争や迫害、飢餓など様々な状況から逃れてきたりした人たちでした。当時は、紛争についてはわかりませんでしたけれども、幼い頃から世界中で起こっていることが自分に影響するのだらうということにはわかっていました。私たちはみんな、つながっているのだと。

というわけで、非常に幼い頃から、「世界というのは、意外と小さいのだな」ということを考えていました。時には大きく思えることもあるけれど、実際は小さいものだと。

そして、世界の反対側で起こっていることが、大きな影響をこちら側にも及ぼしているのだということがわかりました。ですから、世界で何が起きているかということ、どのような状況にあるかということを知ることが必要であると。そして、それによりお互いを理解する必要があると。

つまり、私たちは見かけが違うかもしれませんが、人間は世界中で似ているのだということがわかるでしょう。恐怖、そして希望、それから家族、友だちに安全な生活をしてほしい。より良い生活を子供たちにもたらしたい。こういったことは同じです。このようなものは共通の願いです。ですから、こうしたことを早くから私は気がついていました。ありがとうございます。

司会：それでは、次の質問に移ります。いろいろな高校の方からご質問をいただきたいと思しますので、別の高校の方を。では、こちらの男性の、ちょっとマイクが今から来ますのでお待ちください。

ハラ（盈進高校2年生）：ベアトリスさん、こんにちは。ハラと申します。盈進高校の2年生です。今日は、大変素晴らしい講演を聞かせていただきまして、ありがとうございます。今回、広島が初めてということですが、広島に来られる前と、来てからの印象は何か違いますか。

ベアトリス・フィン事務局長：質問をありがとうございます。そうです、今回、広島に来たのは初めてです。日本に来たのも初めてなのです。核兵器の活動をしておりまして、広島に関しては沢山のことをこれまで読んで参りました。そして写真も見てきました。証言もこれまで沢山聞いて参りました。

しかし、実際に直接見るのは、まったく違いました。今日、平和記念公園を歩き、資料館のほうにも伺って、残された物や写真を見たり、改めて証言聞く体験は全く違うものでした。本当に心を深く動かされる、感情を揺さぶる体験でした。ここに来て、これを二度と起こしてはならないというようなことを考えないことはありません。非常に強い思いに突き動かされるでしょう。

この辺りを歩く人は誰でもこの状況を許すことはできないと感じるに違いありません。ですから、世界のリーダーの方々、政治指導者の方々には広島に来てもらいたいと思います。特に核兵器保有国、また、核兵器に依存している国々、同盟国の指導者の方々にそれを求めます。実際に被爆者の目の前に座って、証言を聞くのを義務とすべきです。そして、どれだけ多くの方が死と破壊を経験したのかということを知ることが必要であると。

ません。これは、必要な経験です。ということで、今回、こちらに来られて、大変うれしく思います。ありがとうございます。

司会：ありがとうございます。それでは、次のご質問をお願いします。では、後ろの男性の、今。はいそうです。

ヒノ：ヒノと申します。核兵器廃絶ということは、すべての国が核兵器を作ることを禁止することです。ICANの仕事が、国や組織によって妨害されたことはありますか。

ベアトリス・フィン事務局長：条約は、核兵器の使用、保有、そして開発のそれぞれを禁止しています。そしてまた、使うと脅すことも禁止しています。すなわち、核兵器を保有できない、製造できない、使用も禁止されるということです。また、他の国と一緒に使用の計画を立てることも禁止されています。

122カ国以上がこの条約を採択しました。そして現在のところ、56カ国が署名し、3カ国が批准しています。少しずつ批准国が増えています。そして実際に非常に重要な話が始まっています。日本、核兵器保有国、その他核の傘の下にある同盟国などにおいて、核兵器の役割についての話が始まっています。いまだに核兵器を使用するとの威嚇を積極的に行っている国がたくさんあるということに対しての問題意識を高めています。ですから、この条約において、これから何年かかけて加盟国が増えるでしょう。

日本、あるいは核兵器国が署名をするまで時間がかかるでしょう。しかし、私たちは絶対にそうなるように固く決意し、活動しています。

ヒノ：ありがとうございます。

司会：ありがとうございました。それでは続けて質問のある方、いらっしゃいますか。では、前の女性の方。

ヒヤマナツミ（広島女学院高校）：こんにちは。お話、ありがとうございます。正確に質問の意図を伝えたいので、日本語で失礼します。ありがとうございます。

広島女学院高校のヒヤマナツミと申します。申し訳ありません。お話のなかで、フィンさんは、自らの希望についてお話をしてくださったのですが、希望をずっと持ちながら活動することって難しいことだと思うのです。その世界のそういう核に対する状況に関して、絶望することもあると思いますし、活動を続けていく中で壁にぶち当たることってたくさんあると思うのですが。そういう時にどうやって希望を持ち続けているのかに

ついてお伺いしたいと思います。

ベアトリス・フィン事務局長：確かにこれは難しい課題だと考えています。なかなか物事は進みませんし、世界の終焉といった大変重いトピックです。もちろん、ひとりでこういった問題を解決できるわけではありません。誰であれ、ひとりでは解決できません。

それで、同じ考えを持った人たちと一緒に活動する必要があるわけです。例えば北朝鮮のような国、人権を侵害するような国から、始めることはできません。まずは自分たちのグループの中で、そして周りの人々と活動を始めるわけです。そして、そういった人たち、同じような考え、価値観を持った人たちと一緒に活動をしていくと、前向きな機運とエネルギーが生まれてきます。

私たちの活動に批判的なある核兵器国の代表者から話を聞いたことがあります。「どうして、常にそんなに前向きになれるのですか」と。「私たちはその逆の方向に行っているのに、どうしてそんなに前向きなのですか」と。しかし、とにかくエネルギーを常に持って、前向きでいることは、人に感染し、広まっていくものだと思うのです。

大きな変革を起こす際には必ず抵抗を伴います。特に平等に関する変革を起こす際には。権力を持っている人々はそれを手放すことに抵抗します。女性の選挙権を勝ち取ったのは男性ではありません。南アフリカのアパルトヘイトに闘ったのは白人ではありません。常に権力構造を変える際には常に抵抗が伴います。変革が完了するまで抵抗は続きます。

しかし、私たちは歴史の正しい側にいるということを憶えておく必要があると思います。核兵器を擁護することで、歴史的に好評価を残すことはできません。コミュニティにおいてのみならず個人のレベルでもそうです。大変困難であったとしても、とにかく正しい側につくということはより良いことです。

したがって、皮肉な考え方に傾倒することなく、人間性においても常に前向きであるということが重要です。前向きであることは物事を変える唯一の方法です。世界中で成し遂げた大きな進歩について考えて見ます。実際に 100 年前と比べますと、人権に関し、正義、平等という意味でも改善してきたわけです。この 100 年間にいろいろな進展がありました。

また、拷問も少なくなりましたし、暴力も少なくなってきました。もちろん、完全な状況というわけではありません。しかし人類として、より良い方向に進んでいるのは間違いありません。

また、ニュースを見ていると、改善しているとは思えないときもあるかもしれません。しかし、100年前を想像してみてください。どれだけ変わってきたのか、どれだけよくなってきたのか。その人類として、どれだけの進歩が見られたのか…ということを考えてみてください。

例えば、女性や有色人種の人々が置かれた状況など。とにかく、より良い方向へと人類は進歩してきています。より広い視点を持てばポジティブになれます。

私たちは、核兵器に関しても正しい選択をするだろうという大きな希望をもっています。

ヒヤマナツミ（広島女学院高校）：お話、ありがとうございます。お伺いできてうれしいです。ありがとうございます。

司会：ありがとうございます。続いての質問がある方。あちらの白いセーターを着ていらっしゃる女性の方をお願いします。

発言者不明（交換留学生）：こんにちは。私は交換留学生です。日本にいます。私はボスニアヘルツェゴビナから来ました。ボスニアヘルツェゴビナでは25年前に戦争がありました。私の母、父は、服も食料も水もなく戦時下を暮らしました。しかし、両親は私に憎しみは教えませんでした。

ここで尋ねたいのは、どうして戦争が始まるのでしょうか。どうして人々が核兵器を使うのでしょうか。

私は、すべての人間というのは、それぞれ世界を変える可能性を持っていると思います。誰も、その力があると思うのですが、私は、メディアは悪い方面ばかり見ていると思います。

普通の人たちの声、普通の人たちが言いたいことを伝えていないと思います。どう思われますか。

ベアトリス・フィン事務局長：ご質問、ありがとうございます。そうですね、さきほど、私は学校の話をしました。ある夏、突然、新しい学生たちが急に来ました。ボスニアから、セルビア、クロアチアからも来ました。記憶の中に恐ろしい戦争の経験を持った人子供たちが入ってきたのです。

なぜ戦争が起こるかという問題に答えるのは難しいことです。私は恐怖と理解不足が原因だと思います。私たちが同じ人間であるということを理解していないこと。そして他の国からきた人たち、他の宗教、他の文化のことを、「他の物」として、私たちとは異なるものだと考えること。

今日、私たちは驚くほど簡単に世界国境を越えて、時間を越えてつながることができます。Google 翻訳があるので、同じ言葉を話していなくても会議することができます。ですが、まだ私たちはつながっていないのです。誰であろうとも、誰かと 20 分間傍に座り、面と向かって座って話せば、それはその相手のことを憎むことは難しいはずで

す。核兵器の問題に関して、政策が反対の人々と話すことは私にとって大変なストレスです。彼らは核兵器を保有する権利を主張します。しかし、その後でコーヒーを一緒に飲んだり、他の話をしたりすると、やはり相手も同じなのだということがわかります。

ですから、解決策というのは、とにかく私たちは立ち上がることです。正義、平等、人道的な価値、それから一般市民の保護のために。一般市民は絶対にターゲットにされてはなりません。戦争において、大量殺りくを目的とした武器を使ってはいけません。しかし、核兵器はそれを目的としています。ジュネーブ条約に違反しています。ある一都市全体を破壊する力を持っているのです。そのようなことは受け入れることはできません。こうしたことに対して私たちは立ち上がって、異を唱えつつも、人との対話を続けなければなりません。

会って、そしてお互い人間だということを認める。ですから、そういう意味において被爆者の証言は非常に重要なのです。水がないとか、怪我をしても包帯がないといった具体的な証言を聞きますが、もし、私たちが爆弾にあったら、同じことになるでしょう。赤ちゃんを抱いている女の人や負傷した人たちを運ぼうとしている人たちの写真も見ました。そういった状況では、みんなが、同じことをするでしょう。

みんな、同じなのです。ですから人間の話をすることがこの問題の解決につながるのです。これは国の安全保障の問題ではなくて、人間の問題なのです。

司会：ありがとうございました。では質問のある方、いらっしゃいますか。一番前にいらっしゃる男性の方に。

発言者不明（男子高校生）：すみません、よろしくお願ひいたします。これから、日本

が ICAN の活動に積極的に参加するようになって、核を持たない、作らないと言って、丸腰のまま、核を持っている国に立ち向かっていくことに対して、その核を保有している国は、どのような評価を日本に与え、どのような行動に出ていくと思いますか。

ベアトリス・フィン事務局長：大変良い質問、ありがとうございます。すべての核兵器国は、「核兵器のない世界を求めて、そして核軍縮を目指している。でも、今はしない。」と言っているわけです。「いつかやる」というふうに彼らは言っています。

それからまた、彼らは、別の国、新しい国が核兵器を開発するということを止めようとしています。日本のような核兵器をもっていない国について私は困惑しています。日本にとって、核兵器を絶対に持たず、核兵器との関わりを絶つと宣言することは国の利益になる、より良いことではないでしょうか。また、それに向けた準備がたとえできていなくても、国の利益になるはずだと思います。

ですが、現実はそのようではありません。核兵器国は、この条約に関して大変批判的です。というのは、規範の力を彼らはわかっているからです。核兵器は、実際にはそれほど役には立ちません。本当に古い、大きな時代遅れの兵器であって、近代の兵器ではないと彼らはわかっています。

しかし、政治的な価値、象徴的な価値があるのです。例えば、北朝鮮を見てください。北朝鮮が核兵器を持っていないければ、誰もこれほど注意を払わないでしょう。核兵器が北朝鮮に力を与える。そして世界の人たちが、北朝鮮に注目し、反応するのです。

こうして核兵器を開発しようとする動機が国々に生まれます。もし、重要な国々とテーブルを囲みたいなら核兵器を開発するでしょう。そういうことが起こるほど、開発が進み、使用される時期が早くなるということです。

核兵器保有国は条約のことを理解しています。彼らは自身が参加しなくても、核兵器を持つということは恥であり、不名誉なことになるということを理解しています。だからこそ反対しているのです。彼らはその力を維持したいのです。

また、日本が条約に参加することで、米国との軍事的な同盟関係が壊れるわけではありません。米国と強い軍事同盟がある国でも、条約に参加している国があります。日本が加盟しても、米国と、通常兵器における同盟を維持するということを禁止するものではありません。核兵器禁止条約に参加しながらでも、通常兵器を用いた米国との防衛同盟を維持することはできます。それは、分けて考える必要があります。

すべての防衛手段を手放すということではないのです。大量破壊兵器使用には、関係したくないと言うだけなのです。である核兵器を禁止するということが重要なわけです。通常兵器は全く別の話です。核兵器使用に関することを除外するだけで、その他の面では米国との大変強い同盟関係を維持することが可能なのです。

司会：ありがとうございました。

発信者：ありがとうございました。

司会：では、続けて質問のある方、お願いします。では、後ろのマスクをかけた女性の方、お願いします。

モネ・オハラ（AICJ 中学校・高等学校）：どうもありがとうございます。私はモネ・オハラと申します。私は核のない世界を実現するためのリーダーの一人になりたいと思いますが、そのような世界実現までには多くの困難に直面すると思います。そうした世界を実現する上で、我々が直面する最も大きな困難とは何でしょうか。

ベアトリス・フィン事務局長：リーダーになりたいと思ってくださるのは非常にうれしいし、是非そうなってください。私たちが直面している最も大きな困難というのは、物事を変えられるということを私たち自身が信じようとしないことだと思います。一番の障害は私たち自身の中にあるのです。

というのは、力を持ってイいるのは私たち市民です。政府は、私たちのために仕事をするので。皆さんが、安倍首相の上司なのです。その逆ではないのです。皆さん、もしくは皆さんのご両親が、彼の給料を払っているのです。自分たちには力があると。そして決定する力があるということを理解する必要があります。それは大変な仕事です。しかし、自分たちにはそれが可能だということをまず信じなくてはなりません。自分で理解し、また、同じように信じている人を探し、信じていない人を説得しなくてはなりません。これは大変な仕事です。

しかし、一旦、十分な数の人たちを集めれば、変化というのは止めることはできないのです。ですから、最も大きな障壁というのは、信じないということ。

少しシニカルであるほうが、カッコイイとか、あるいは、この問題は解決不可能だから他のことに注力するなどという考えに傾かないことです。この問題に、皆さんの生活、すべてを賭けなくてはわけではないのです。これをやるために、仕事を辞める必要はあ

りませんし、起きている間中、このことだけをしなくてはならないなどということはないのです。自分の生活をし、他のことをしながら、いくつかの活動に関わりサポートしていくことはできます。メンバーとして属する組織は見つけたほうが良いかもしれませんが。会議に出るとか、あるいは時々、署名書にサインをしてみてください。そういったことを皆さんがそれぞれ少しずつすることにより、前に進むことができます。

つまり、「これはうまく行くのだ。そして私たちは変化を起こすことができるのだ。」という確信を持つことが一番難しいのです。そして、大きなことであれ、小さなことであれ、ずっと続けていくということです。

発信者：ありがとうございます。

司会：ありがとうございました。では、続いての質問ですが。大学生の方で、質問があるという方がいらっしゃれば。では、ワインレッドの上着を着ていらっしゃる男性の方をお願いします。

カタツグ・リョウヘイ（九州大学）：貴重なお話ありがとうございました。九州大学のカタツグ・リョウヘイと申します。私からの質問が、これはすごく自分自身も考えなければいけない間だと思うのですが。何で ICAN のような新しい世代の若い人たちを中心とした運動が、日本ではなく、ヨーロッパのほうから始まって、広まっていったのかということが、すごく自分の中でも疑問に思っていて。私自身、若者として活動しなければいけないのではないかとは思いつつも、なかなかできていなかったという部分もあって。今日、すごく今、お話を聞きながら考えていたのですが。

そこに関連するもう一つの問で。今回、日本に来て、こうやって若者の方々と触れるなかで、日本でそのような若者、新しい世代を中心とした運動が広まっていくのではないかという、先ほど希望とか楽観とおっしゃられていましたが…そのような下地はあった感じられましたか。

個人的な自分の今日、来た感想として。すごく地元の大学生が少ないというのは、一つ感想として思ったのですが。高校生、中学生の方がすごく多いのですが、何で日本のこの大学生って、一番今、暇な時期であろうに、今日、これほど来ていないのだろうかかとすごく思いました。それなので、何かお考えがあったら教えていただきたいです。

ベアトリス・フィン事務局長：どうして来られなかったのか、ちょっとわかりませんね。しかし、この部屋には十分な人が集まってくださっていると思います。

まず、日本では、平和活動は大変強いものがあります。実際に、日本の多くの組織が ICAN にも参加してくださっています。それから広島、長崎の被爆者の方々が、私たちのキャンペーンに大きな貢献をしてくださっています。私たちの活動の方針や理由は、まさにその被爆者の方々の影響を受けています。

私たちは今、スイスのジュネーブに本拠を置き活動をしています。これは国連がジュネーブにあるからです。また国際的なキャンペーンだからです。私たちは日本の社会、特に被爆者の影響を受けています。しかし、もちろんこれ以上のことを期待しています。

一つには言語の問題があるかもしれません。コミュニケーションは、ほとんど英語でなされます。そういったところがあるかもしれません。しかし、今、日本語での ICAN の Twitter のアカウントも作ってもらっています。したがって、ぜひ、日本語で ICAN の活動をフォローしてください。そしてぜひ、参加してください。それが一つの解決策だと思います。

もっと多くのパートナー組織、そして支持者や活動家を集めたいと思っています。活動家の方に参加してもらいたいと思っています。Nuclearban.org または日本のパートナー組織がありますから、その組織にコンタクトしてみてください。

実際、日本の若い人たちと話をすることで希望を見いだしていますよ。しかし昨日、気になる統計を聞いたのですが、日本の若い人は投票をしないと聞きました。18 歳で投票できるそうですが、実際に投票に来る若者は少ないというふうに聞きました。これは変える必要があります。選挙で選ばれた人々が、皆さんの生活、暮らしに影響を与えるわけですから。なので、その決定に影響を与える必要があります。もし、投票しなければ、皆さんの将来を、より上の世代が決定するということになってしまいます。ですから、若い方々に政治的に関心を持って、活動してもらいたいと思います。

もちろん、このような問題が、若い人にとっては、少し大きすぎる問題だと思えるのかもしれませんが。専門家、これはいわゆる核兵器の専門家の人々にも問題があるかもしれません。そういう人たちは、核物理学で博士号を持っており、より歳の上の方々がワシントンとか東京にいて、難しい用語を使いながら検証がどうのこうのという話をしているかもしれません。

でも私たちが ICAN でやろうとしているのは、あなた方は専門家である必要はないということを示そうとしているのです。核兵器のすべてを知っている必要はないし、あらゆる

る条約に関して詳細までを知る必要はないと私たちは思っています。これは正しいか、間違っているかということです。一つの街全体を破壊し、何十万人の市民を殺すということが正しいかどうか、それだけの問題です。

いろんな複雑な条約だとか、それから安全保障の政策がどうだとか、そういったことを話しますと、真理は見えなくなり、市民の参加を妨げます。市民の参加があれば、核兵器はずっと前になくなっていたはずなのです。ですから、私たちは、とにかくこれを単純な問題として捉えてもらいたいと思っています。

皆さんそれぞれが、専門家や首相と同じだけの発言力を持っているわけです。皆さんそれぞれが、18歳以上であれば投票権を持っているわけです。そういった意味では平等です。なので、皆さんに何か物事を言う権利がないと誰にも思わせないでください。また、若い人々をどのように巻き込んでいくかということも大事だと思います。自分たち周りの若い人々に考えてもらうようにしてください。皆さんは、より上の年代と同じだけの決定権を持っているのです。今の問題を起こしたのは彼ら上の世代なのですから。

皆さんが何もしなければ、今度は皆さんの子供の世代が核兵器の使用による影響を引き受けなくてはならないかもしれません。したがって、皆さんがこの問題を解決しなければなりません。

カタツグ・リョウヘイ（九州大学）：ありがとうございます。

司会：ありがとうございます。はるばる九州大学から来られたということなのですが、ぜひ、広島の大學生で黒い女性の方。マイクが来ます。

ムコウジ（広島市立大学4年 女子学生）：素晴らしいプレゼンテーションをありがとうございます。私はムコウジと申します。広島市立大学の4年生です。非常にプレゼンテーションに刺激を受けました。プレゼンテーションで言われましたように、日本政府、そして日本が核なき世界へと先導しなくてはいけないことを合意します。

スウェーデン政府は、まだ、この条約に参加されていません。スウェーデンを例にとりまして、どのように政府と交渉するのか、そして自分の政府との交渉をこれからも続けられるのかどうか、ということをお教えてください。

ベアトリス・フィン事務局長：ありがとうございます。良い質問だと思います。スウェーデン政府は、日本の政府とは違って、交渉自体には参加しました。そして、この条約

の採択について賛成をしました。交渉に参加し、条約採択に賛成したのですが、署名していません。外相は署名を表明しましたが、米国とまだ NATO の緊密な軍事関係があります。ですから、米国からの非常に大きな圧力がかかりました。米国は、軍事的な協力を一切しないと脅しをかけてきました。そこで圧力に立ち向かうために国家的な調査を実施しました。

政府が専門官を外務省の中で任命し、防衛省、人道問題を扱う部署、また緊急対応を担当する部署の人たちがすべて入って、もしスウェーデンがこの条約に署名するとどのような影響があるかということ具体的に調査しています。もし、この条約に入ったら、どのような影響があるのかという調査をしています。ただ単に米国の圧力を恐れるだけでなく、事実を見るのです。これが良い結果につながることを期待しています。

現在、スウェーデンは、核兵器の使用に関わっておらず、製造にも関わらず、保有にも関わっていません。ですから署名はできるのです。日本政府も同様のことをすべきだと思います。現在の政府が条約に署名したくなくても、将来はするかもしれません。時間はかかるかもしれませんが、日本は署名すると思います。この条約は、最終的には署名国を増やしていくでしょう。ですから日本政府は署名すべきだと思っています。今はその用意がないかもしれませんが、しかし、それがもし、将来的に起こった場合。そのときは、どのような形で、どのような影響があるかということ今調べておく必要があると思います。

私はこの広島の後、東京に行くつもりです。そこで、いろいろな政治家に会うつもりです。私たちは、国の調査を始めて欲しいということ言うつもりです。どのような活動が今、行われており、条約の署名によってできなくなることは何か。あなた自身が署名しなくても、いずれ日本は署名することになります。日本が何をしているのかを知らせることは民主主義にとっても国民にとっても良いことであると。実際に核兵器の使用、開発、所有について今、現状はどうかということ。そして日本の政府がそれに関わっているのか。そういったことをきちんと国民に知らせるべきだと思います。

これは民主的な議論を行うためにこのような調査をすることは良いことだと思います。簡単に署名する、署名しないと早まった判断をするのではなくて、そのような国家的な調査を行い、事実を議論のテーブルに載せるべきだと思います。スウェーデン政府と私たちは、緊密な関係を持っています。一旦調査が終わると、正しい立ち位置に立てると確信しています。このような同じ作業を日本にもして欲しいと思っています。

司会：では、時間が限られておりまして、ここまでは若者を中心に質問をいただいたの

ですが。大人の一般の方で、申し訳ございません、おひとりだけとなるのですが、手短にご質問を。では、真ん中の手を挙げて、グレーにコートを着ていらっしゃる男性の方、お願いします。

一般男性：こんにちは。私は広島市内で、今、現在、安保法制の意見訴訟で提訴をしている原告団のひとりです。この間も、広島市立大学の市民講座で ICAN の川崎 哲先生から講義を受けまして、矛盾しているのではないかと。

「この条約に解釈を変更されるということがあったときにどうしたらいいか」、ということ質問したことがあるのですが。その時に、私はお聞きしたお答えは、銀行とかそういうところで非難を受けるのだから、ということだったのですが。そんなことで、この解釈の変更をすることが防げるだろうか。それが心配です。せっかく良い条約ができたのに、解釈の変更で勝手に解釈をされた時に、どういう手立てができるのだろうか、ということをお聞きしたいと思います。

ベアトリス・フィン事務局長：この条約は、明瞭だと考えています。核兵器の使用、製造、保有、これを禁止しています。これは解釈の対象にはなりません。大変明瞭です。署名すれば、核兵器を使用することも、保有することも、作ることもできません。もし、核兵器国であって条約に参加すれば、核兵器の廃絶に向けてのスピードという点では柔軟性があります。しかし、とにかく核兵器を使用しないこと、新たに開発しないことについては、遵守する必要があります。

この条約は将来的な交渉のためのものであります。核兵器国に参加してもらわなければ、どれだけ早く廃絶できるかということが見えてきません。例えば、核兵器 10 を持っている北朝鮮と 7000 の核兵器を持つ米国では状況が違います。廃絶のスケジュールも条件も異なってくるでしょう。

しかし、この条約自体は大変明瞭で、使用、保有、開発については明確に禁止されています。もちろん、すべての条約と同様に、例えば、金融機関が投資を引き上げるようなことだとか、解釈によりましては、より厳格に解釈するところと、そうでないところがあるかもしれません。

しかし、それは、やはり国民が決め、自国政府に要求することになるのだと思います。日本は、まもなく、間違いなく、この条約に署名すると思います。すべての日本の銀行が核兵器からお金を引き上げる、こういったことはもう、既にできるわけです。例えば、年金基金だとか、銀行に対しての要求は条約が成立した今、日本が署名していようがい

まいが、既に可能なのです。

ということで、このような活動というのは、ずっと続いていきます。ずっと続くということは気の滅入るようなことではありますが、私は希望を持っています。とにかく良い方向に向かっていると。そして、まずは、この条約に参加してもらおう。そして、できるだけ厳格にこれを履行してもらおうということです。履行されなければ、裁判所に行き、強く訴えます。私たちは、これからも進歩が必要だと思われるべきあらゆる事柄について行動を起こします。

一般男性：ありがとうございました。

司会：それでは、時間がかぎられておりますので、大変恐れ入りますが、ここで質疑応答の時間は終了させていただきます。